

長期間の少雨・高温に対する農作物等の技術対策

令和8年8月26日
南筑後普及指導センター

【共通】

・極度な土壌乾燥は生理障害発生の原因となるため、ほ場の土壌水分に留意し、根や草勢の状態を確認して、かん水や施肥などの適切な管理を行う。

【普通作】

1 少雨・高温の影響

<水稲>

水稲は、出穂後に高温が続くと、「白未熟粒」や「充実不足」の発生による玄米外観品質の低下が懸念される。

病害虫については、少雨・高温により発生が増加するおそれがある。

<大豆>

大豆は、高温が続いて土壌水分が不足すると生育不良となり、節数・分枝数が減少する恐れがある。また、開花期以降は莢数の減少や百粒重の低下が発生するおそれがある。

2 対策

<普通期水稲>

- (1) イネが最も水を必要とする穂ばらみ期～出穂開花期を中心に湛水管理を行う。
- (2) 用水が有効に利用されるよう、ほ場の漏水防止対策に努める。
- (3) 登熟期の水管理は間断灌水を基本とし、早期の落水を避ける。
- (4) 紋枯病やトビイロウンカ、斑点米カメムシ類は、高温により発生が増加するおそれがあるため、適期防除に努める。

<大豆>

- (1) 土壌の過乾燥を防止するため、本暗渠の栓を閉める。（栓がクリークの水位よりも下にある場合は開けたままにする。）ただし、多量の降雨の場合は、栓を開けて排水を行い、再度、栓を閉める。
- (2) ハスモンヨトウやカメムシ類は高温により発生が増加する恐れがあるため、適期防除に努める。

【野菜】

1 少雨・高温の影響

全体的には、高温による生育停滞や品質低下、少雨による害虫の多発が予想される。

施設葉菜類では、葉先枯れや生育停滞の発生が、施設果菜類では、着果不良や乾燥による尻腐れ果の発生が懸念される。

2 対策

<共通>

- (1) かん水は、少量・多回数を基本とし、土壌や育苗中の培土の過乾燥を防ぐ。
- (2) 病害虫は、うどんこ病、ハダニ類、カメムシ類、ヨトウ類、アザミウマ類の発生が増加することが予想される。少発生時の防除に努める。

<施設野菜>

- (1) ハウスの妻面やサイド、肩部を大きく開放して換気に努め、ハウス内の温度上昇を抑える。
- (2) 換気扇や循環扇を活用して強制換気と外気導入を図る。
- (3) 寒冷紗による遮光や遮光剤の塗布により、ハウス内の温度上昇を抑える。
- (4) アスパラガスは、蒸散量が多くなる時期なので土壌が過乾燥にならぬようにかん水する。
- (5) 果菜類は、急激に土壌水分が変化するような管理は病害発生や品質低下を招く恐れがあるのでかん水回数を増やす。草勢が弱った場合はやや若採りし、薄めの液肥を施用する。

<露地野菜>

- (1) 光を反射するマルチ資材やワラでうね面を被覆し、地温の上昇と水分蒸発を抑える。
- (2) 露地果菜類は、水量が確保できれば夕方に畝間かん水を行い、水量が限られる場合は株元に手かん水を行う。
- (3) 露地葉菜類は、定植後活着するまで、株元に手かん水を行う。

<イチゴ苗>

- (1) 鉢土の水分状況を常に観察（育苗床内の乾きやすい場所に特に注意）し、過乾燥で萎れないうちにかん水する。
- (2) 寒冷紗被覆（風通しは必ず確保する）により鉢土からの蒸散を防ぐ。ただし、かん水過多に注意し、曇天が続く場合は一旦除去する。
- (3) 高温・乾燥により、ハダニ類の多発が懸念されるので、初期防除に努める。
- (4) 高温により薬害を生じやすいので、夕方でも葉温が高い場合は、事前に薬水程度の少量の散水を行い、葉温を下げてから防除する。
- (5) 雨よけ被覆を行っている場合は、妻部分を開放するとともに肩部分も可能な限り巻上げ、ハウス内の通気を促し温度を下げる。
- (6) クリークの水をかん水に利用している場合は、クリークの水が少なくなると塩分濃度が高くなることがあるので注意する。

【果樹】

1 少雨・高温の影響

- (1) 果実の陽光面では果実温が高くなり、日焼け果（カンキツ、ブドウ、キウイフルーツ、ナシ）が多発する。
- (2) ブドウ、イチジクでは、着色遅延や着色不良を招く。
- (3) 成熟期の高温は、成熟異常果（軟熟果、過熟果、果肉褐変等）を誘発する。
- (4) 収穫後（流通段階を含む）の高温により果実の日持ち性が悪くなる。
- (5) 施設果樹では、高温になりすぎて葉焼けや樹体の衰弱等が発生する。
- (6) 露地果樹では、土壌が乾燥しすぎると葉焼けや落葉が発生し、樹勢が低下する。
- (7) 苗木では、葉焼けや萎凋が発生し、症状が進むと枯死につながる。

2 対策

- (1) 日焼け果の発生防止として、徒長枝の誘引等によって果実に日影を作る。また、カンキツではサンテ（果面保護資材）の被覆等、キウイフルーツでは笠掛けにより日焼け果の発生を軽減する。
- (2) 園内の夜温を少しでも下げるため、かん水はできるだけ日没後に行う。
- (3) 適熟収穫に努めるとともに、日焼け果や成熟異常果が混入しないよう、収穫前の果実品質の把握と選果選別を徹底する。
- (4) 収穫は果実温が低い早朝に行うとともに、収穫果実の品温を上げないよう収穫後や搬送中のコンテナには日除けシート等を被せる。なお、イチジクでは予冷し、品温を下げる。
- (5) 収穫が終了した施設果樹は、速やかに天井被覆を開放し、十分なかん水を行う。収穫中の施設果樹では、妻面の開放や、換気扇、循環扇を活用し、異常高温を回避する。
- (6) 露地果樹および苗木では、敷きわらに加え十分なかん水を行い、根域の水分保持と昇温抑制に努める。かん水は、ほ場にまんべんなく散水するのではなく、樹直下の土壌にしみ込む（根のある深さ 10～20cm まで）様に行う。また、2～3 日おきの葉水を行い、樹体に水を吸収させることも有効である。

【花き】

1 少雨・高温の影響

- (1) キク類では、高温により開花遅延が発生する懸念がある。
- (2) トルコギキョウでは、短茎開花や茎葉の軟弱化等の懸念がある。
- (3) 露地栽培では、葉の萎れ、日焼け等の障害や開花遅延、草丈の伸長抑制が発生する懸念がある。
- (4) 高温・強光により葉色が薄くなり、欠乏症等が発生する場合がある。
- (5) ハダニ類やアザミウマ類等の発生が増加することが予想される。

2 対策

- (1) 施設栽培では、ハウスの妻面やサイド、肩部を大きく開放して換気に努め、適切な遮光により、気温や地温、植物体温度の上昇および乾燥を防ぐ。また、かん水は夕方に行い地温の低下を図る。

- (2) トルコギキョウでは、少量多かん水を行い植物体及び地温の低下を図る。
- (3) 露地栽培では、乾燥害を避けるため適宜かん水を行う。畝間かん水は日没後から早朝にかけて行い、湛水状態は短時間にするよう努める。
- (4) 必要に応じて、液肥施用や葉面散布を実施する。
- (5) 収穫は早朝などの比較的気温の低い時間帯に行う。鮮度保持剤を活用し、清潔な水で水揚げする。
- (6) 害虫の発生に注意し、早期発見に努めるとともに、適期対策を行う。

【畜産】

1 高温の影響

家畜は、暑熱ストレスにより飼料摂取量が大きく減少するため、乳量減少、乳成分率の低下、増体量の減少、産卵率の低下および受胎率の低下等が発生する。

2 対策

- (1) 体温の上昇を防止するため、屋根散水、細霧、送風、寒冷紗設置などの遮光による畜舎内の温度の低下を図る。屋根散水や細霧を行う場合は、十分な送風を行い畜舎内の湿度上昇に注意する。送風機は、清掃しツバをつけることで風速をアップさせる。
- (2) 大家畜に対しては、消化性が良く第一胃内での発酵熱の発生が少ない良質粗飼料の給与、給与回数の増加、粗飼料の切断長の短縮などが効果的である。
- (3) 飼料は、涼しい時間帯（早朝又は夜間）に給与し、水槽の掃除により新鮮な水を常時、十分な量を飲めるようにする。
- (4) 給与飼料中の蛋白質が過度にならないようにし、発汗等によりミネラル不足も懸念されることから鉱塩は切らさずに、ビタミンは通常期より増給する。
- (5) 高温や多湿は、飼料の変敗が懸念されることから、湿気の少ない冷暗所でなるべく保管し、カビが確認できたエサは給与せず、カビが見えない場合でもカビ毒吸着材などを活用する。
- (6) 食べ残した飼料は飼槽内で変敗しやすく、変敗した飼料はハエ等の衛生害虫の発生を助長するため、食べ残した飼料は早期に片付け、飼槽は清潔に保つようにする。